

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第六號

昭和十年十二月一日發行

論叢

消費利子の問題……………文學博士 高田保馬
車稅の基本的問題……………法學博士 神戸正雄

時論

産業組合製絲と養蠶農家……………經濟學博士 八木芳之助

研究

統計調査論……………經濟學博士 蛭川虎三
資本制生産の發展と商業關係……………經濟學士 堀新一
株式價格構成の原理……………經濟學士 石田興平

說苑

朝鮮に於ける金爲替本位制……………經濟學士 松岡孝兒
限界生産力說と新勞銀基金說……………經濟學士 飯田藤次
古典學派の商業概念について……………經濟學士 松井清

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第三十一卷乃至第四十卷論題索引
本誌第四十一卷總目錄

限界生産力説と新勞

銀基金説

飯田 藤次

一 問題提起

現代分配理論の支配的學說の一つとして、われわれは限界生産力説を擧げる事が出来る。然して、此の學說に對する批判或は吟味は、從來主として、數學的に如何なる前提の上に立つてゐるか、或は是を構成する諸方程式が一般均衡の方程式體系に對して如何なる意味を有するか、と云ふ方向から爲されたのであるが、¹⁾此處では、夫の方向からする問題は一應採り上げない事にし、次の方向に限局する事にする。即ち、ベエム・バワクに依つて、「利子の高さ」の決定を取扱ふ際に、初めて提起されたる理論、新勞銀基金説と此の限界生産力説との間に、如何なる關係があるか、夫の關係には何等の矛盾も包藏されてゐないか如何か、と云ふ方

向に、である。

私は、夫れを視るために、二説の間の關係を、次に述べる二個の問題として把握する。

問題一。限界生産力説に依れば、社會の總生産物は、各生産財の限界生産力に、各生産財の存在量を乗じたるものの總和に等し、といふ所謂第三命題の成立を視るのであるが、此の場合、土地、勞働、資本に分配されるものは各々地代、勞銀、利子であると考へられてゐるのである。然し乍ら、此處に資本として把握されてゐるものは、實は中間生産物なのであり、夫れが中間生産物である限り、終局的には土地と勞働とに解消さるべき筈のものであるから、若しそう云ふ事が許されるならば、利子も亦、地代と勞銀とに分解し盡され、靜態に於いては利子の存在する餘地が無い事となる。此の點はシユムペーターに依つて最も徹底的に述べられてゐる。

然るに新勞銀基金説に於いては、例へばベエムの表式を見れば直ぐわかるやうに、夫處では靜態にも利子

1) 例へば、E. Schneider; Bemerkungen zur Grenzproduktivitätstheorie (Zeitschrift für Nationalökonomie, Bd. IV.) 1933.

が存在する事に成つてゐる。猶ほ、彼の「勢力が經濟法則か？」²⁾なる論文の敘述をみても此の事は瞭である。即ち夫處で、彼は、企業家の資本元本に觸れる事なしに、國民經濟が、資本利子を消滅せしめ、或は少なくとも、完全な自由競争が支配する場合に生ずるやうな「自然的利子率」以下に夫れを壓し下げるやうな勞銀は、持續性を有するだらうか、と問題を提起し、夫れは結局、嘗て「追放した資本利子」を、再び國民經濟の中へ導き入れる結果に成る、と敘べる場合に瞭かである。

斯くてドルブは云ふ。「若し、事實上生産手段の價值が、最終生産物の價值に依つて決定されるものならば夫處には、夫の上猶ほ利子の如きものが適合すべき何等の Hiatus も成立しないであらう」³⁾と敘べ、然るに一方に於いて限界生産力説を採りながら、他方に於いて勞銀基金説を採る事は矛盾である、と云ふ。今や、問題は、限界生産力説を採り乍ら、勞銀基金説を採つた場合に、夫處に存在する利子は何處から來るのであ

るか、と云ふ事を解明すべきものとして現はれ、若し夫れが説明されないならば、限界生産力説は此の點から、放棄を要請されねばならない。

問題二。限界生産力説に依れば、各生産財の價值は各生産財に依つて生産された生産物の價值によつて決定される、のであるが、若し、生産過程が一定の時を要するものとすれば、各生産財の所有者は、生産過程の初めに於いては、未だ生産物が生産されてゐないために、夫々の分前を受ける事が出来ない筈である。従つて、各生産財の所有者達は、生産過程が一應終結する迄の間に、餓死しなければならない結果になる。云ふ迄もなく、此の事の不合理は瞭かである。

之に反して、勞銀基金説に於いては、各生産財は、生産過程の端初に於いて既に、一定の價值を有するものとして現はれ、即ち夫の時に存在する勞銀基金の中から、一定額の分前を支拂はれて、生産過程に參與するものとなつてゐる結果、限界生産力説に現れた背理は存在しないのである。斯くてヴィクゼルは云ふ。「ワ

2) Böhm-Bawerk; Macht oder ökonomisches Gesetz? (Gesammelte Schriften von Eugen von Böhm-Bawerk, Herausgegeben von Franz X. Weiss) 1924.
3) E. C. van Dorp; Agio oder Lohnfonds? (Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik 66. Band 2. Heft) S. 290.

ルラスの立場に於いては、勞働の供給者も、夫他の生産手段の供給者と等しく、生産期間中自らの力によつて生活を支へ、生産が終つて後、夫生産物價格(賣上)の中から夫對價、例へば勞銀が支拂はれる。けれどもこれは誤りである。⁴⁾と。今や、問題は、勞銀基金説の屬性とも云ふべき前拂性と、限界生産力説との關係を如何に理解すべきか、と云ふものとして現はれる。

以上に依つて私は、限界生産力説と新勞銀基金説との關係を二個の問題として把握したのであるが、次に、此の關係を正しい光の中に於いて解明するための、基調を求めよう。

最後に私は猶ほ、次の事を附加しなければならぬ。と云ふのは、限界生産力説も新勞銀基金説も共にベエムの内部に共在してゐるが爲めに、私の是からの議論は、ベエムを中心に進むであらう、と云ふ事である。

二 基 調

問題解決のための基調を、次の方向に置きたいと思ふ、即ち、新勞銀基金説の典型的なものとしての、ベエムの表式の中に、勞働の限界生産力が含まれてゐるか何うか、若し含まれてゐるならば、如何なる形に於いて含まれてゐるのか、と云ふ風に。

模索の手懸りを、二つの部分に分つ。

(1) 限界生産力説第二命題。

高田教授は云はれる。「……注目すべきは單位生産財(例へば一定期間の勞働)の生産力の大きさである。……即ち、一人一年勞働について云ふと、一年迂回生産の生産物價值は、使用勞働者數が六十六人の場合も、三十三人の場合も、四十人の場合も等しく三五〇フロリンであるし……生産迂回年數が一定である限り、即ち生産方法が一定である限り、各企業の生産物數量は使用勞働者の増加につれて大であるはずであり、生産力もまた變化するはずであらう。さうみると此場合には、限界生産力の動きが全く抽象せられてゐるとしか考へられぬ。……」⁵⁾以上の引用に依つても瞭であるやうに、

4) 高田保馬：經濟論叢38卷6號25-26頁

5) 高田教授：新勞働銀基金説について、經濟論叢38卷6號31-32頁

教授は、表を横に讀む事に依つて、限界生産力を求めようとしてゐるのであるが、夫の求め方には問題があらう。何故なら、われわれが表を横に讀む以上、生産方法の變化は無い筈である。生産方法を、複數の生産財の量的比率と解する限り、此の比率の動かない以上、限界生産力が動く筈がない。此の比率の動かないと云ふ事は、此處では、生産期間が動かない事と理解すべきが故に、労働者が六十六人であらうと、三十三人であらうと、生産期間が依然として一年である限り、限界生産力の動きの見られない事は當然である。従つて、労働の限界生産力を求めるために、表を横に讀む事は、意味が無いのである。

次に問題に成つて來るのは、表を縦に讀む事である。高田教授は云はれる。「此際、限界生産力の大きさを如何にして求めたか。……労働の増減によりて生産迂回期間が變化するものと見るかによつて。……(此)の場合に於いては資本の増減が無くとも、生産方法そのものが變化してゐる。限界生産力説は生産方法を變化せ

しめず、同一の生産方法に於いて、生産財の小さな部分を加除することを前提としてゐる⁶⁾。と。表を單純に縦に讀んで行けば、労働者數の變化するに連れて夫の他の生産財もまた變化して居るのであるが、限界生産力説が純粹な形であるためには、何れか一方の生産財が固定されて、一方の生産財數量のみ微量量づゝ動かされる事を要するのである。従つて此の事情が、表を單純に縦に讀む事を不合理たらしめるのであつて、教授の様に、生産方法の變化が然らしめるのでない事は、既に述べた。

然らば何等かの方法に依つて一方を固定し得れば求め得るだらうか。そのために、次の操作を始める。生産期間が、従つて生産方法が變化しない限り、限界生産力の動きはない筈であるから、二年迂回の労働者數三十三人を二倍し、三年迂回の労働者數二十二人を三倍し、以下之に順じて、各生産期間の使用労働者を全部、六十六人に還算する。斯くて表を縦に讀めば、資本財のみ増加して、労働者數は固定する、資本財の生産

6) 高田教授；新勞銀基金説に付いて、經濟論叢38卷6號39頁

力が求められる。夫の反對の操作に依つて、勞働の生産力が求められる筈である。

然し乍ら此操作は、(1)資本數量が任意に動くものと考へられてゐる事に依つて勞銀基金説と、(2)資本財は本源的生産財でなく、勞働に還元し得るものであるが故に、複數の生産財なく、固定すべき生産財を失ふ事に依つて限界生産力説と、撞着する。

以上三つの仕方で、勞働の限界生産力を求めようとしたのであるが、限界生産力を求める事に依つて、勞働と夫の生産物との價值關係が何う成つてゐるか、を知らうとするのが共通の目的であつた。生産財とその生産物との價值關係を、夫の生産財の限界生産力を媒介にして表明してゐるものは、正に限界生産力説の第二命題である事に思ひ致れば、われわれが今迄なして來た操作は、ベエムの表の中に、第二命題が入つてゐるか何うかを求めて來たものと云へるのである。

然るに彼は彼の表を構成する場合に、勞働とそれによつて生産される生産物との價值を相等しと想定する

が故に、例へば二年生産に於いて第一年の投資勞働とそれによつて生産された第二年目の生産財と價值相等しと想定するが故に、最初から第二命題の介在を要しない事となつてゐるのであり、然る限り此の表にそれを求める事は意味を持たないのである。

(2) 限界生産力説第三命題。

第三命題は次のやうに書き表はされる。

$$V_1 \frac{\partial \Phi}{\partial V_1} + V_2 \frac{\partial \Phi}{\partial V_2} + \dots + V_n \frac{\partial \Phi}{\partial V_n} = x \dots \dots (1)$$

此方程式は一見して瞭かな様に費用法則を意味する。

然るに費用法則は、彼によれば規則的攪亂原因と不規則的なそれとによつて偏異せしめられるのであるが、此等兩原因の何れも生産過程が時を要するといふ事にその根據を置くのである。⁷⁾ 不規則的偏異に關して今叙べないが、規則的偏異とは「生産手段群のその生産物への移行が要求する時間の長さに應じて價值差の大きさが段階付けられる⁸⁾」といふ事であり、この價值差こそ資本利子なのである。かくて費用法則がその「理想的純粹」さを以つて妥當するためには、以上二個の攪

7) Schneider; 前掲論文

8) Böhm-Bawerk; Positive theorie des Kapitaless, erster Band S. 315-317. 參照

9) Böhm-Bawerk; Positive theorie des Kapitaless, erster Band S. 219.

亂原因が存在しない事を前提しなければならない、然も是等の事情は「時間」に附隨してゐるものであるが故に、生産過程に時の要素が導き込まれる事を捨象しなければならぬのである。

然し乍ら、われわれが先にも述べた様に、生産過程に時を要する事が現實であるとすれば、費用法則は意味を爲さない事になる。夫處でベームは云ふ。「(資本利子)の説明は、後段に致つて猶ほ充分に」行ふであらう。「生産手段と夫の生産物との價値の一般的關係を對象とする吾々の現在の論述と、夫の事とを混同してはならない。従つて私は、目下の間は、夫の價値差異の存在は全然抽象するであらう。」¹⁰⁾従つて、ベームに依れば、二段に理論が區別されてゐる。第一段に於いて、先づ、生産手段と生産物との一般的價値關係が取扱はれ、夫限りに於いて攪亂事情たる時の要素は無視されるのである、費用法則は、此處に理想的純粹さを以つて顯現する。第二段に成つて初めて、彼は攪亂事情たる時の要素を理論の中へ採り込み、斯くて費用法

則は修正される。

我々の費用方程式も亦、修正を要求される。

$$\frac{\partial \phi}{\partial V_1} + \dots + V_n \frac{\partial \phi}{\partial V_n} = \frac{x}{(1+i)} \dots \dots \dots (2)$$

第二理論段階に致れば、最早や時の要素を抽象し得ないが故に、各生産財の限界生産力は、現在價値に還算されねばならない。生産物Xにもまた同様な事が妥當する。方程式(2)の兩邊に(1+i)を乗すれば、次式を得る。

$$\left(V_1 \frac{\partial \phi}{\partial V_1} + \dots + V_n \frac{\partial \phi}{\partial V_n} \right) (1+i) = x \dots \dots \dots (3)$$

此方程式は、ウィツクゼルの夫れ

$$S = 1 \left(1 + \frac{x}{1+i} \right)^{12)}$$

と等しい構造を持つ筈である。此處で私は結論し得る。限界生産力説第三命題は、方程式(3)の形に於いて、勞銀基金説に入つてゐるのである、と。

此處で次事が問題になる。我々は今迄、費用法則の理想的純粹さを修正するものは、時の要素である。と

10) Böhm-Bawerk; Positive theorie des Kapitaless, erster Band. S. 219.
 11) 第二段に致つて採り込むのは、規則的偏異を生ぜしむる事情のみである。不規則的變異を惹起す事情は依然として、捨象されてゐる。
 12) Wicksell; Über Wert, Kapital und Rente.

單純に述べて來たのであるが、時の要素が、如何なる道を通じて、如何なる根本事情に依つて、修正を要求するものとして現はれたか、が瞭にさるべきである。

周知の様に、ベームに依れば、「常に現在財は、同種同數の將來財より、より、高い主觀的價值を持つのである。主觀的價值評價の合成力が客觀的價值評價を決定するのであるから、常に現在財は、同種同數の將來財より、より、高い交換價值と價格とを持つ事に成る。」のであるが、事態を此の方向に結果せしめる根據として三個のものが¹⁴⁾挙げられてゐる。然し乍ら彼は、後に「資本利子の高さ」を問題にする部分に致つて、生産方法の収益力の差異は、¹⁶⁾生産的貸金に、第一、¹⁷⁾第二理由は消費的貸金に對して、¹⁸⁾決定的である事を敘べてゐるのを見ても、彼は、資本利子の説明のために必要なのは、第三根據だけであると考へた事が覗はれるのである。

然し乍ら、第三根據のみを以てしては、費用法則を修正する決定的事情を、説明し得ないのであつて、資本家をして利子を獲得せしめる根本事情を知るために

は、――夫の事は、例へば彼の「積極理論」の中に繰り返して述べられてゐる事なんだが――彼の論文「勢力が經濟法則か」を見る事にしよう。²⁰⁾夫處に於いてベームは、企業家の資本元本に觸れる事なしに、國民經濟が、資本利子を奪ひ去るか、或は少くとも、「自然利子率」以下に引き下げるような、そう云ふ勞銀は、持續性を持つものだらうか、と問題を提起し、此問題を解くために、國民經濟に利子が全然無くなつて仕舞つた状態を假定して論を進める。即ち、若し國民經濟に全然利子が無いならば、現在財と將來財とは差益なしに交換され、貸金は利子なしに得られるであらう。その場合には、「期間を要する、より、強く資本主義的な生産迂回は、より、収益的であるといふ經驗法則」が利子に依る何等の重荷を負はされる事なしに、前面に現れる。生産期間は無限に延長されようとする。斯くて現在財に對する需要は、夫れ夫れの限界を超へて奔騰し、與へられたる生活資料在高を以つてしては、無限に延長されたる迂回期間の間、同一數の勞働者に、生産資料を

13) Böhm-Bawerk; Positive theorie des Kapitaless, erster Band, S. 327.

14) Böhm; S. 328-362.

15) Böhm; S. 438-464.

16) Böhm; S. 338-362.

17) Böhm; S. 328-331.

18) Böhm; S. 333-338.

與へる事が不可能となる。一度破門された利子は、再び國民經濟へ歸つて來る。と。

以上に依つても瞭かな様に、國民經濟へ資本利子を呼び戻すものは、資本數量の一定といふ事情である。然も資本數量の一定といふ事情が、直接にはなく、第三根據の道を通じてである、夫れが第三根據を通ずる限り、時の要素と密接な連繫を有する。かくて、費用法則の修正は、時の大小に照應して大小である、と述べる場合に、結局は、與へられたる資本數量の大小を意味してゐる筈である。

三 解答と批判

私は、第二節基調に於いて、限界生産力説の第二命題及び第三命題が、勞銀基金説の中に含まれてゐるか何うかを吟味し、第二命題は含まれないものとベエム自身に依つて前提されてゐる事を視、次に第三命題が修正された形に於いて含まれてゐる事を吟味して來たのであるが、此事自體、既に問題一、問題二に解答を

與へてゐる筈である。營、念のための解答と二三の異説を批判する事にする。

解答其の一。ドルプは前に敍べた理由から、兩説は擇一の關係に在ると結論するのであるが、此の説は誤りである。²¹⁾何故なら、成る程限界生産力説に依れば、利子の説明し得ない事は事實である。然し乍ら限界生産力説の屬する理論段階は、生産手段と生産物との一般的價值關係が取扱はれる段階なのであつて、夫處に於いて利子をも取扱はんとするならば、われわれはベエムと共に、「混同してはならない」と言はなければならぬ。然も、此處に於いて定立された一般的價值關係は、理論段階の高まると共に、資本數量の一定といふ事情から修正され、時の長さに照應する利子が現はれて來る事が説明された限り、新勞銀基金説と限界生産力説とは何等の矛盾も考へられないのであり、提起された問題自體存在しない事になる。

解答其の二。例へばドルプは「限界生産力説」は、時間の順序と云ふ見地から見ても支持し難い。²²⁾と云ひ、

19) Böhm; S. 439.

20) Böhm-Bawerk, Macht oder ökonomisches Gesetz? (Gesammelte Schriften von Eugen von Böhm-Bawerk, Herausgegeben von Franz X. Weiss) 2924. S. 277-285.

21) 青山學士; ヱイクセルの自然利子論、經濟論叢39卷4號-5號、に於いて、此の問題が提起されては居るが、解決を「次に殘された問題」とされてゐる。

「勞銀基金説に依れば、勞銀は二個の要素に依つて決定される、勞働者に渡される財の在高と投資期間の長さ」とに依つて。けれども限界生産力説は、勞働の限界生産力説に依つて勞銀を決定する。何れか一方の説が正しいのであつて、兩説は調和さるべきものではない。²³⁾「勞銀基金説は、今日の限界生産力説を排斥する事は、瞭である²⁴⁾」と敍べる場合に、或は高田教授が、「私見によれば、(1)前拂の見解は支持せらるべきものであらう。生産過程の同時化の理論を以つてしても、それは斥けらるゝことは出来ないであらう。(2)前拂の見解をとるときには……少くとも、勞銀を……限界生産力によつて説明しようとする試みはすてられねばならぬであらう。」²⁵⁾と敍べられる場合に、何れも前に述べた問題二を提起され限界生産力説の放棄を主張せられるのである。然し乍ら、此等の説も亦誤謬である。何故なら、われわれの説明に依れば、生産手段と生産物との價值關係が、先づ問題にされ、各生産手段は此處に於いて限界生産力に依つて一應價值を與へられ、次に一定の

修正を経て、生産過程の端緒に現はれる。限界生産力説は、時の要素の抽象された段階の理論であるが故に、生産手段の所有者達の餓死問題は起らない筈であり、時の要素の抽象すべからざる段階の理論、新勞銀基金説に於いては、生産財は生産過程の端緒に於いて既に價值を有するものとして現はれる。従つてまた、問題二の存在する餘地がない。

われわれは、以上に依つてわれわれの課題を解決し終へたのであるが、此の問題に關して生じた一二の問題に簡単に觸れる事にしよう。

高田教授は云はれる。「費用法則」は「生産財の價值が生産物の價值によりて定まり、而も後者は残りなく前者に推し移つる」が故に、妥當し得るのであるが、「勞銀基金説に於いては、勞働の價值、従つて勞銀の決定が生産物の價值の歸屬によつて行はれない。」²⁶⁾斯くて「勞銀基金説としての利子理論は、費用法則を否定する」われわれは、最早や斯かる考へ方が誤りである事に對して、詳述する要を認めないであらう。何故なら

22) Dorp; Agio oder Lohnfonds? S. 313.

23) Dorp; S. 301.

24) Dorp; S. 312.

25) 高田教授; 勢力無くして利子なしといふ理論(經濟學研究4卷1號)62頁.

26) 高田教授; ベエムの利子生産力説(經濟論叢38卷4號)34-35頁.

費用方程式が如何なる形で勞銀基金說の中へ含み込まれてゐるかに對する説明と、前拂性と限界生産力說に對してなした説明とを省みれば、足るからである。

私は、兩説は調和すべきものではない、と云ふドルの戒めにも拘らず、敢へて調和を企圖したのであるが、兩説の調和はシュトリグルに依つても成されてゐる。²⁷⁾

彼は、次の方程式組織を掲げる。

IIa. r. 4.

IIb. II.

Lは勞銀基金、aは勞働者數量、wは生産期間、rは勞働基金に依つて定まる勞銀、gは限界生産力、lは限界生産力に依つて定まる勞銀であるが、此の式に關して、「此の二つの方程式が、相竝んで同時に妥當するかどうか、問題なのである。此處に於いては、われわれは、兩方程式の同時的妥當がないにしても、自由市場の運動が照應せる適應に導くかどうかを尋ねる事に依つて、答へる事が出来るであらう。」と述べてゐる。²⁸⁾

古典學派の商業概念について

此のシュトリグルの說に對して高田教授の批判²⁹⁾がなされてゐるのであるが、其の他に猶ほわれわれの立場から、二三の事が言へる筈である。即ち(1)シュトリグルの限界生産力の方程式は單純に勞銀と夫の生産力とを等しと置いたのみであつて、此だけの方程式を以つてしては、夫の他の限界生産力說を構成する諸數量との聯關が全然認められないといふ事である。(2)先にも述べた様に限界生産力說と勞銀基金說とは理論段階が異なるのである。同時に、相竝んで妥當せしめんとする企圖自體が誤りである。

四 結 論

結論は簡單である。限界生産力說と勞銀基金說とは二者擇一の關係にあるものではなく、また同時に相竝んで妥當し得るものでもなく、二者は理論段階を異にして妥當し得るものであると云ふ事である。前者は、生産物と生産財との一般的價值關係の世界に、後者は此の世界に時の要素が導き込まれた世界に、各々夫の妥當の領域を持つ、と云ふ事である。

27) Richard Strigl; Lohnfonds und Geldkapital (Zeitschrift für Nationalökonomie 5. Band 2. Heft. 1934.) S. 23-26.
28) Richard Strigl; Lohnfonds u. Geldkapital.
29) 高田教授; 新勞銀基金說(34-38)386號